ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理　Monthly Bulletin　Vol.24 No.9 September 2023

天理大学 おやさと研究所　Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

・巻頭言
天理教学の扉を開く
／井上　昭洋 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」（7）
本連載における「翻訳」について ⑥
／加藤　匡人 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（15）
戦前台湾における本島人信者の信仰形態②
／山西　弘朗 3

・社会福祉からみる現代社会 ―天理教の社会福祉活動に向けて―（10）
天理教社会福祉の理論的展開（2）－その課題－
／深谷　弘和 4

・コロンビアへの扉―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（29）
7. コロンビアの非日常 1：お祭りの話　その1
／清水　直太郎 5

・ニューヨーク通信（17）
SoulFire 天理教フェイスカンファレンス
／福井　陽一 6

・2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（9）
第 2 講：168「船遊び」
／尾上　貴行 7

・おやさと研究所ニュース 8
第 358 回研究報告会「静岡市における朝鮮通信使の展開と共生社会の実現―行政・市民団体・地域組織・在日コリアン団体の取り組みを中心に―」（7 月 6 日）／「2023 年度天理大学アメリカス学会夏期定例研究会」で発表／ 2023 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

天理教学の扉を開く

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

『天理教事典　第三版』によれば、天理教学は「信仰の内側からなされる」、「信仰を前提とした」研究であり、「天理教の教えを信仰する者の実存が要請する信仰行為としての学問」、すなわち「信仰の学」である。[1] 澤井（2006）は、天理教学とは「親神の啓示とその真理性に対する信仰をその基本とし」て、教理内容を探求し人間存在のあり方を理解しようとするものであり、「もしも こうした天理教学の根本的立場を踏まえることなく教義研究を進めるとすれば、たとえそれが教義および信仰を語るものであったとしても、それは天理教学研究ではない」[2] と宣言する。極論すれば、信仰的情熱に基づかない教学研究は天理教学にあらずということだ。

現在、天理教学の研究者を自認する者はおしなべて天理教の信仰者であると思われるので、澤井の主張を待つまでもなく、彼らはそれぞれの信仰信念に基づいて天理教学研究を行っているはずである。信仰者の言葉で言えば、親神から与えられた「ようぼく」学者の「御用」として、（ようぼくとして）教理の研鑽に励み、（学者として）教学研究を展開しているのだと思う。天理教学に勤しむ者全てが信仰者であれば、信仰の学としての天理教学という位置づけは揺るぎないものと考えてよいだろう。しかし、天理教学者のエトスが、天理教の信仰を天理教学の前提条件とするのであれば、天理教学はネイティブ（信仰者）によるネイティブ（信仰者）のための閉じられた学識となる。

このようなパラダイムにおいて、ネイティブ宗教学としての開かれた天理教学は果たして可能なのだろうか。確かに、天理教学は他宗教の神学や教学と同様に、歴史的には信仰の学として形成されてきた。しかし、単なる学識ではなく「学問（ディシプリン）」であることを目指すのであれば、その出自において信仰の学であったからといって、未来永劫そうあり続ける必要はないのではないだろうか。

ところで、天理教学は一般に、原典学、歴史教学（教会史）、教義学、実践教学（教会学・伝道学）の 4 つの研究領域に分けられる。この 4 つの領域のうち、教義や信仰について研究する原典学や教義学はともかく（この 2 つを射程に入れて論じるには紙幅が足りない）、教会史や伝道学の教学的研究において天理教の信仰が前提条件とされるのであれば、それはどのような理由においてなのだろう。この条件のもとでは、例えば、未信者の日本宗教史研究者による天理教教団組織の近代化についての研究は、日本の一新興宗教についての歴史学研究であって、教学研究にあたらないことになる。一方、同じ研究トピックについて天理教を信仰する研究者が論じるのであれば、それは教学研究と見なされる。しかし、この場合、史実のなかに無意識に神意を読み取ろうとしてしまう信仰者のバイアスがかかるかもしれない。さらに、それがネイティブ（信仰者）の視点に基づく解釈であるということに気づかないのであれば、その歴史学的研究において信仰が足かせになっているとさえ指摘されるだろう。

私の考えるネイティブ宗教学としての天理教学は、ノンネイティブ（非信仰者）による天理教学を許容する「開かれた」天理教研究でもある。信仰の学としての天理教学の扉を内向きに閉めたままにするのではなく、その扉を開くことの可能性について考えてみるべきではないかと思う。

［註］

（1）『天理教事典　第三版』pp. 609-610.

（2）澤井義次（2006）「天理教学のパースペクティヴとはなにか」『天理教学研究』42，pp. 7-19.